

# 組織の捕喰者

(○ | v | ) &lt;Howdy!)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

東京喰種出身の男主をコナンワールドに投入。

あてんしょん！

- ・ 投稿者にはわか。原作なんかほとんど読んでない。
- ・ 学生ゆえ、不定期更新。
- ・ 時系列が分かる人がいたら、そつと教えてほしいな。
- ・ 不定期更新。大事な（ry

目次

捕喰者との邂逅	1
捕喰者と黒の組織	3
捕喰者と狙撃手さんにん	10
捕喰者と科学者	15
捕喰者のおしごと	19
捕喰者と幹部候補さんにん	22
幕間・他人から見た捕喰者	25

## 捕喰者との邂逅

何がどうしてこうなった。

青年は苛立たしげに頭を搔いた。足元には綺麗に真つ二つにされた人体が複数転がっており、濃厚な血の匂いが漂っている。その香りが青年の空腹を執拗に刺激するが、そうも言ってられないのが現状である。

光の乏しい廃ビルの中、足元にはバラバラの死体。目の前には顔を青くして驚愕に目を見開く女性と、紙みたいに顔色を真つ白にして必死に口を押さえて目を背けるごつい男性。それと、最初こそ驚いたものの楽しそうに凶悪な笑みを浮かべる銀髪の男性。

何がどうしてこうなった。

もう一度頭の中で復唱し、青年は諦めたように溜息を吐いた。

そこそこ平穏になった生活にけちがつき始めたのは、大体一週間ほど前からの事だった。

青年——瀬長悠貴せながゆうきは転生者である。だからこそ転生した際に東京喰種の世界だと理解できたし、朝起きた時に知らない場所に放り出されていても非現実的な事象のせいだと割り切れた。転生によって良くも悪くも常識を破壊された結果、どんなふざけた事だつて起こりうるのだと認識を改めた末路でもある。

しかし「そういうもの」と割り切るにも限度がある。東京じゃなくて東都であることや、CCGや喰種が存在しないことはともかくとして、年間死者数が喰種が存在している世界とそう変わらないのは一体どういうことなのだろうか。しかも、米花町なる町のみ異様に犯罪発生率が高い。死神でも居座っているのか。ふと某特等捜査官が脳裏に浮かび、慌ててその影を消し去る。思い浮かべたが最後、死んでようが世界が違おうが、ふらつと出沒しそうで恐ろしい。それに、あれは寧ろ死を遠ざけるタイプだ。

閑話休題。

瀬長は米花町には極力近づかないことを決めた。度重なる犯罪によって訓練された警察や探偵の相手をするなど御免被る。しかも犯罪者ネットワークは浅くとも広く、なおかつ素早い。裏で噂になつてしまえば、いずれ表にも漏れていく。伊達に白鳩共の追跡を誤魔化してきた訳ではない。些細な可能性も潰していかねば生き残れない世界だった。

瀬長は喰種である。一ヶ月に一人喰えば問題なく生きていけるし、天敵がないからといって必要以上に喰い散らかす程大食漢でもない。ただ敢えて言うならば、その日は運が悪かったのだ。

たまたま食事サイクルの空腹期で気が立っていて。

たまたま路地裏でチンピラ崩れに絡まれて。

たまたまそいつらが裏の大組織でヘマをした下つ端で。

たまたまそいつらを処分してきたのが、手隙だった幹部達で。

たまたま彼らにチンピラ共を素手で解体していた所を見られただけだった。

—— 役満だな、これ。

怯えの視線を二つ、好奇の視線を一つ。それらをひしひしと感じながら、脳内での独り言にすら論破された瀬長は再度溜息を吐いた。

## 捕喰者と黒の組織

三人の中で唯一怯まなかった瘦身長躯の銀髪の男性は、ジンと名乗った。『黒の組織』、『例の組織』、あるいは単に『組織』と呼ばれる巨大犯罪シンジケートの幹部であると自己紹介し、組織の一員として迎え入れたいと言った。本人曰く、殺し方が気に入ったらしい。長いこと闇側こちらに居たが、そんな殺し方は見たことがない、とも。瀬長は口には出さず、だろうな、と思った。首をへし折る程度なら人間の筋力でもなんとかなるだろうが、刃物よろしく素手で人体を切断するなど常識の埒外だろう。それこそ喰種かそれに類する別種でなければ不可能だ。

ジンとしては予想外な拾い物をした程度の認識なのだろうが、他の二人はそうではなかったらしい。声を潜めてこそいたが、女性からは正気を疑われていたし、ごつい方の男からは泣きが混じった声で撤回を懇願されていた。正直、心外である。敵味方の区別もつかない程イカれているつもりはないし、一般人への擬態は得意だ。理性のない怪物みたいと言われるのは——人喰いの怪物ではあるが——流石に不快だった。

とは言え、ジンはそもそも他者の意見を考慮する気すら無かったらしい。端的に鼻で笑って一蹴し、近寄る危険が分かっているだろうに、歩み寄って手を伸ばした。出会ってほんの数分だが、ジンの聡明さは瀬長も理解していた。メリットデメリットを計算した上で、裏にどんな秘密があるにせよスパイでなければ別に良い、と判断を下したらしい。

思い切りの良いヒトだな、と思う。分かりやすい程に警戒する後ろの二人の反応が普通だと思うのだが、常識には囚われないタチらしい。まあ、悪い気はしない。伸ばされた手に、自分の手を重ねる。

「じゃあ、よろしくお願いしますね、ジンさん？」

瀬長の喰種としての笑みに、ジンは獣の如き獰猛な笑みを以って返した。

うん、悪くない。

あ、喰いそびれた。

内心はどうあれ、少なくとも誠実に対応してきたジンに誠意を返さないのはどうなのだろうか。

そんなことをふと考えた瀬長は、乗せられたジンの愛車の中でカミングアウトした。と言っても、人肉のみ食せる事、収納可能な捕喰器官っぽいもの——というよりそれそのもの——がある事など、人とはとても呼べない各種能力があることのみだったが。後々になって、知らなかったと責められることの無いようにと話したのだが、それぞれ“ウォツカ”、“ベルモット”と名乗った男性と女性からはドン引きされた。借りたナイフを目の前で腕に突き刺しまくったのがいけなかったのかもしれない。刃はこれっぽっちも通らなかつたのだから別に問題ないだろう、なんて考える辺り、瀬長の思考もこちらの人間のそれからは大きく外れている。喰種という生半な兵器では対処できない生物を知らない彼らからすれば、至極当然の反応である。

尚、ジンに誠意を云々を後にベルモットに知られた際、お前大丈夫かみたいな顔でまじまじと見られたことに関しては、瀬長はどうしても納得がいていない。

数日後。

ジン配下の組織の下っ端として加えられて以後、瀬長の初めての仕事である。が、他の下っ端もおらず、他にいるのは直属の上司であるジンに加えてジンの副官代わりの幹部ウォツカ、勧誘された日にもいたベルモットの三人のみ。下っ端の自分以外全員幹部とか新手のイジメだろうか、なんて考えが浮かぶのも無理もない。

困惑が顔に出ていたらしい。違う、と短く否定した後、ジンが話し始めた。

ジンは瀬長を連れ帰った後、即座に「あの方」と呼ばれるボスに連絡した。ジンから詳細を聞いたボスとその片腕のラムは扱いに悩み、その特異に過ぎる生態と能力を徹底的に隠すよう指示した。下っ端の情報を把握しておくべき幹部に対してすら、スパイの可能性の無いごく一部の人物——幸運な事に、瀬長が最初に出会った三人——にのみ把握を許し、その上で詳細の口外を禁じた。

というのも、もしその情報が事実であれば、元々規模の大きい組織が戦い面で更に一歩前に出ることができる。また、その逆も然り。引き抜かれるわけにはいかないし、対策をされるわけにもいかない。

今回の任務は先の情報が正しいかを精査する為のテストであり、特例を作っても早々に幹部に据え置くに足る人材かどうかを測る為の試金石でもある。下手な人物を寄越すわけにもいかない為、前述の三人が記録・報告係になった。

なるほど、と瀬長は頷いた。直前になって伝えられた任務内容は敵対組織の殲滅。瀬長としては別に構わないのだが、些か急過ぎやしないだろうか。また顔に出ていたらしい。ジンはニヤリと笑って告げた。

「聞いた話が本当なら問題ねえだろうか？」

「いやまあ、問題はないですけど…」

「なら良いだろうが」

キィ、と軽くブレーキ音を響かせて止まったのは、郊外のそこそこ古びたビルの近くだった。周辺の建物の中では段違いに高く、航空戦力でも持ち出さない限りは正面突破は難しそうだった。裏路地にあることと夜中であることも相まって、外に人通りはない。板で打ち付けられた窓が殊更古さを強調するが、喰種の鋭敏な感覚は中に多数の人が存在する事を伝えていた。見張りの為か、周囲にも見えないように人を伏せている。が、瀬長に言わせればお粗末に過ぎる。瀬長の基準が喰種を念頭に置いたCCGの防衛網なので、比べる相手が悪いとも言えるのだが。

ぴきり、と異音を立てて瀬長の眼球が黒々と充血する。それと同時に体が軋み、皮膚を裂きながら二本の尾が突き出した。赤紫色の毒々



しい尾を撓<sup>しな</sup>らせ、僅かな光を反射しながらてらと鈍く輝いている。その尾に、薄青緑色の硬質なものが鎧のように巻き付く。生物的な輝きを持つ尾とはまた違う、金属的な輝きを持つそれはよく見れば肩甲骨の辺りから生え、先端に向けて鮫肌のように逆立った細かい棘が見て取れた。それが肉を抉るのに効率的な形状であることを察したベルモットが冷や汗を流し、尾を生やしたことにウオツカが顔を蒼白に染め、ジンは面白そうに喉で笑っていた。

「じゃあ、行つてきますね」

気負うこともなく告げ、瀬長は大きく上に跳躍した。人体の構造上、どうしても死角となる上からの奇襲。見張りとして配された者達は、何に襲われたのかすら知る事なく絶命した。扉の前に軽い音と共に着地すると、扉ごと一階に居る敵を尾で串刺しにしていく。無駄に練度が高くて躲せた者は不幸であろう。掠っただけでごっそりと肉を持っていかれ、反撃にと撃った銃弾は真正面から受け止められた拳句通用しない。心を折られた末に待つのは、気怠げな尾の一閃。

組み立てられたバリケードもなんのその。急造とはいえ中々に堅牢なそれを蹴りの一発でガラクタに変え、尾で哀れな獲物をズタズタに引き裂いていく。隠し通路らしき場所にいた者を壁ごと串刺しにしては、そのまま反対側にいた敵も駄賃代わりに肉を抉る。決死の覚悟で突撃してくる数人の男を思い出したように素手で引きちぎってからは、抵抗も下火になっていった。

「た、助けてくれよ、なあ、なあー！」

「これは夢、これは夢、これは夢これは夢これは夢これは夢——」

「やだ、やだ、やだ、死にたくない、死にたくない！」

抵抗の代わりに叩きつけられたのは、哀願だった。泣き叫ぶ者、縋る者、正気を手放した者。喰種に狙われたヒトが、今際の際によく見せる姿だった。

「ごめんね、お仕事だから」

だからこそ、それらを切り捨てるのも慣れたもの。別段の感慨もなく、首と体を泣き別れさせていく。瀬長とて転生したての頃は当然ながら嫌だったが、生きる為に殺していれば嫌でも慣れる。喰<sup>ころも</sup>わねば死

ぬ、だから喰<sup>ころす</sup>う。それだけだった。

最後の一人となったこの組織のボスたる男は、覚悟を決めていたらしい。逃げることもなく、堂々と座したまま瀬長を迎えた。ゆっくりと歩み寄る瀬長から目を逸らさず、じつと見据えたまま拳銃を撃ち続けた。効かずとも、ずっと。

銃弾が尽きる。かちん、と虚しい音を響かせた拳銃を眺め、男が諦めたように笑った。疲れ切った笑みだった。

「お見事」

首が飛んだ。

終わったという連絡を受け、ベルモットはジンやウオツカと共にビル内に足を踏み入れた。噎せ返るような血臭と、引き裂かれた腹部から溢れ落ちた内臓のぬらぬらとした輝きに僅かながら吐き気を催す。

巨大犯罪シンジケートたる組織の幹部の一人として人の死など見慣れているベルモットだが、このビルの中に溢れている死は、知っているそれよりも尚原始的で残酷だった。

ウオツカはベルモットをして可哀想になる位に蒼白で、必死に吐き気を堪えているのがよくわかる。実働部隊の実質トップとも言えるジンの副官なだけあって、ベルモット以上に様々な形の死と慣れ親しんでいるウオツカである。それでもあれほどに辛そうなのは、戦闘員であるウオツカが触れることの早々ないものに触れたからであろう。例えるなら、子供が虫を戯れに踏み潰す行為だろうか。強者が弱者を悪意なく虐殺する、蹂躪の究極形。

ちらりと視線を向ければ、この光景を前にしてさえ、ジンは笑みを浮かべて平然と写真を撮っていた。写真が報告用とはいえこの男、やはり頭のネジが何本かトんでいる。ベルモットはその認識を再度固めた。

廃ビルを上に登れば登るほど、瀬長と名乗った男の異常性が露わになる。蝶番や錠前ごと吹き飛んだ鉄製の扉と壁に挟まれて絶命していた男や、どうにも素手で無理矢理引きちぎられたと思しき死体など、明らかに尋常ならざる手段で殺害されたと一目でわかる。

ぱき、ごき、ぐちや。生々しい音が階を登るにつれ次第に大きくなっていく。何が行われているかなど最早論じるまでもない。ジンはさつさと足を進め、それに続く二人の足は重い。最上階まで登ったジンが、躊躇なく扉を開ける。

瀬長は食事中だった。尾の一本を地面に突き刺して器用に椅子を作り腰掛け、もう一本で食材を引き寄せたり解体したりしている。血塗れの椅子に座る体には首がなく、その体のものと思われる頭部には眼球がなかった。そのうちの一つは瀬長の口元で転がされている。もう一つが見当たらない辺り、恐らく既に胃の中なのであろう。瀬長が手に持つ腕にはいくつもの菌型があり、骨が見えている部分すらあった。もう片方の手には湯気が上がるカップが持たれ、濃密な血臭に混ざる僅かな匂いから、それがコーヒーであることが辛うじて理解できた。

ウオツカが耐えきれず、口を押さえて部屋を出た。ベルモットも流石に隠しきれぬ程に顔を蒼白に染める。正直に言えば今すぐ出て行きたかったが、瀬長が高い殺戮能力を持つ事がわかった以上、ある程度好印象を持たれている方がいい。ウオツカの背中を見て苦笑していたことから、別段気にはしていないようだが。

食事風景を写真に収めたジンが、酷薄な笑みを浮かべたまま話し掛けた。

「よお、想像以上だったぜ」

「そうですかね？」

瀬長が小首を傾げる。本人の態度と状況を見るに、戦闘とすら思っ  
てはいまい。

今回知るところとなった、明らかに人ならざる器官、人を喰らうその食性、高すぎる身体能力。成る程本人の意思がどうあれ、裏に生きざるを得ない人種であろう。擬態はできても、真に表では生きられない

い。それを思えば、哀れですらある。

やるじゃねえか、とジンに肩を叩かれる瀬長の照れ臭そうな姿を見て、ベルモットは僅かに悲しげに目を細めた。

この数日後、瀬長にはコードネームが与えられた。

錆びた釘の如き色を持つウイスキーベースのカクテル、ラストイネイル。

“組織最凶の暴力装置” と呼ばれる幹部の出現だった。

## 捕喰者と狙撃手さんにん

瀬長がコードネームを貰ったのち、他の主なコードネーム持ちとも顔を合わせた。ただし、ラムの命令で全身余さず隠した状態で。

黒のスーツに黒のトレンチコートを羽織り、黒のブーツに黒の手袋。フルフェイスの黒塗りの仮面を付け、内蔵された変声機で声を機械音声に変換。トドメにフードを被れば、頭の高から足の先まで黒一色の不審者の完成である。素肌など全く見えない、完全黒一色。

こんな格好で外に出れば事案認定待ったなのだが、ラスティネイルの主任務は敵対組織の殲滅や対象の暗殺である。人目に触れる必要がないか、そもそも人目に触れてはならないかの二択なので、実のところ格好そのものに問題は無い。それに、素顔で一般人に紛れても極一部の人間以外はラスティネイルだと分からない、という利点もある。

ラスティネイルが初めに顔を合わせたのは、コードネーム持ちの男二人・女一人の狙撃手だった。左目の目元に蝶の刺青をした勝気な性格の女性がキャンティ、帽子とサングラスを身につけた寡黙な男性がコロン。二枚目風のサングラスをかけた男がカルバドス。

三人が一樣に口を揃えたのは、ある意味当然の事についてだった。「なあ、何でそんなに隠してるんだい？」

「…何か、後ろめたい？」

「流石にガチガチすぎやしねえかなあ…」

ですよね、とラスティネイルも同意した。そこからは三人に対して愚痴の嵐。

幹部とはいえ新入りだし、古株中の古株たるラムに逆らうわけにもいかない。だからといって仲間ですら顔を見せないのはどうかと思うし、そもそも暑くてかなわない。口調だって無理矢理中性的なものに変えているし、プライベートなことを聞かれても答えられないばかりか、プライベートで会っても話しかけることも許されない。

ぐちぐちぐちぐち。止まらない恨み節に根を上げたのは狙撃手組、特に堪え性のないキャンティだった。

「ああああ、もう！さつきから延々とぐちぐちと！聞いているこつちの方が鬱になつちまうよ！」

ええ…と呆れるラステイネイルの手をキャンティがおもむろに掴み、コルンとカルバドスに目配せをせずると引きずっていく。

「え、ちよ、え、どこに連れてく気ですかねえ!？」

「ええいうるさい！気分転換にちよいと任務で敵の脳漿ぶちまけるよ！」

「気分転換が物騒すぎる!?!ちよ、コルン、カルバドス、助けてえ！」

「…頑張れ…」

「あー、まあ、おつかれ？俺達も付き合つてやるからよ、ほら、元気出せ、な?」

「やめろお！その哀れむ視線をやめろお！」

結局。

「はあ…来ちゃったよ…」

「おうおう、そんなに嫌だったか?」

「いや、別に嫌ではないんですけどね?何というか、気疲れしてしまつて…」

「ほらほら、うだうだ言つてないで準備するよ!さあ早く！」

「…オレ、頭撃ちたい…」

「的は沢山あるんだ、んな事気にしてんじやないよコルン！」

今回の仕事は、敵対組織の殲滅。ラステイネイルとしては想定された通りの仕事だから構わないが、五十弱の相手の拠点に、いくらコードネーム持ちのみとはいえ狙撃手主体、しかも四人のみで襲撃を掛けるとは何事か。狙撃を得手とする人間は、意図的に訓練を積まない限りは接近戦に弱い。ラステイネイルから見てカルバドスはまだしも、キャンティとコルンは典型的と言えそうだった。とは言つても組織の幹部は例外なく食えない連中ばかり。隠し玉の一つや二つあったとしても驚きはしない。

ラステイネイルは各方面に散開して狩りの準備を進める狙撃手達を何となしに眺めながら、今回の任務でやれそうな事を模索し、考えに耽つていった。

「あーもう！亀みたいに籠りやがって！」

「いや、狙撃手に対する対処としてはこの上なく適切だろ」

『頭…撃ちたい…』

『こつちの連中も、完全に引きこもっちゃまいやがった』

まあ当然の事ながら、狙撃されれば姿を隠すのが当たり前。建物があるのなら、内部に陣取って立て籠もるのは当然と言えた。隣で騒ぐキャンティは兎も角として、通信機越しに聞こえるコルンとカルバドスの声もどこか不満げだ。とはいえ、見張りの為に外に出ていた人員のほとんどを手早く片付けたのには流石と言わざるを得まい。狙撃一本で幹部にまでのし上がってきた狙撃手達の腕は確かである。

しかし籠られては手も足も出ない。仕方ないか、とラスティネイルは腰を上げた。

「は？アンタ、どこに行くんだい？」

「え？いや、ちよつと突撃してこようかと」

「へ？」

『おい、待て、早まるな』

『…流石に、無謀…』

「適当に放り投げるから、それが見えたら的当ての再開ね？」

『聞けえ！』

カルバドスの制止をさらりと聞き流し、ラスティネイルは身を翻して籠城先へ向かう。パルクール染みた動きで屋根を伝い、籠城先の建物の屋根を踵落として破壊し侵入する。それを見たキャンティの驚愕の叫びを通信機越しに聞きながら、手早く敵の手足をへし折って無力化していく。銃声をBGM代わりに、鼻歌交じりにぱぱつと処置を済ませ、侵入時にこじ開けた穴の付近に全員を乱雑に積み上げた。

「おーい、準備済んだから始めるよ？」

『…え、あ、お、おう…』

ラスティネイルの声に反応したのはカルバドスだけで、その声も辛うじて絞り出したような声だった。キャンティとコルンは恐らく絶

句しているのだろうか、なんて考えながら、適当に選んだ数人を掴み上げる。

「さて、クレー射撃もどきの開始かな」

その言葉と共に、ラスティネイルは掴んでいた男達を穴から投げ飛ばした。

ラスティネイルのあまりにも強引すぎる制圧手段に絶句していた狙撃手達だったが、宙に舞ったのが人間であることに即座に反応し、ほぼ条件反射的に照準を合わせ発砲。投げ飛ばされた三人の男達を阿吽の呼吸で分担し、各々が頭部に一発を叩き込んだ。

「おお、やっぱり流石に上手いな」

三人の成人男性をほぼ同時に高々と投げ飛ばすという強烈な事をしておきながら、ラスティネイルの声はあくまで平常。

キャンティとコルンは一瞬固まったものの、楽しそうという事も相まって早々に切り替えたいらしい。調子を戻した——むしろよりハイになったキャンティの催促に応じ、ラスティネイルは的の山に手を伸ばした。

「いやあ楽しかったよ！やるじゃないかアンタ！」

「…また、やりたい…」

「正直、いきなり突撃した時は肝を冷やしたけどな」

ばしばしとキャンティに肩を叩かれ、コルンからの好評を貰い、カルバドスから言外に心配させんなど言われたラスティネイルは、割と仲良くなった三人と連絡先を交換し、また一緒に任務に行く事を約束して別れた。

裏社会の者はほぼ例外なく弁えている。事情に嘴を突っ込むべきではないと知っているし、現に三人もラスティネイルに深入りはしなかった。ラムに口止めされていることも理由の一つだろうが、それ以上ラスティネイルが語りたがっていない事を察したからだろう。その心遣いが嬉しくもあり、心苦しくもある。

表には行けず、さりとて裏には染まり切れず。ほんと俺面倒な性格



してんな、と自嘲して、ラストイネイルは帰路についた。

## 捕喰者と科学者

「……初めまして、ラストイネイルだ」

「……初めまして、シエリーよ」

「……………」

「……………」

誰か助けて。

十分程前。

付いて来い、と一言告げたジンによって半ば引きずるようにして連行されたラストイネイルは、入り組んだ道の先にぽつんと佇む施設へと連れてこられていた。警備兵であろう人員がジンの姿を見ては頭を深々と下げているので組織の施設であることは理解できたが、基本的に壊す事しかできない自分に何をさせたいのだろうか、とラストイネイルは訝しんだ。施設内部は清浄で、白衣を着た人影がうろつく様から研究施設であろうことは容易に想像できる。ますますもって分からない。ラストイネイルは戦闘技術以外は一般人程度のものしか持たない。まさかモルモットになれとでも言いたいのだろうか。

ラストイネイルの本質を知るジンにはお見通しだったらしい。若干呆れたような目をしながら、ここに来て漸く説明を始めた。

「この先に科学者の幹部がいる。コードネームは『シエリー』。有能だが、組織への忠誠はほぼ無え。逃げる可能性もあるからな、匂いはしっかり覚えておけ」

猟犬代わりだろうか。鼻は確かに利くが、だからといって犬扱いは遺憾である。察したららしく鼻で笑ったジンについていくと、セキユリテイの一際堅い扉に辿り着いた。それは既に取り繕う事さえ辞めた牢獄で、侵入よりも脱出を阻む事に主眼を置いた造りだった。

嚴重なロックを解除され開いた扉を潜り、絵に描いたような研究施設を抜けていく。白いリノリウムの床、マウスの入ったケージ、大小様々な機器、雑然と積み上げられた資料、綺麗に区分けされた薬品群。衣擦れと小さな議論の声以外は静かなもので、だからこそラステイネイルの感覚に引つかかる、殺人者とはまた違った微かな死の香りが嫌に強調される。似た匂いは確か、嘉納医師が漂わせていただろうか。好奇心の名の下に、あらゆる命を踏み躪ってきた男。気に食わない顔を思い出し、ラステイネイルは仮面の下で眉を顰めた。

ここで待つてろ、という言葉に従って、先行したジンを見送ったラステイネイルは何となしに周りを見渡した。清潔な部屋に似つかわしくない血の匂いを嗅ぎ取る。数多くの動物のそれと、小規模ながら人間のそれを。アオギリの樹に属していた頃に見たものとは匂いの質も濃度も比較にならないが、内包する狂気はある意味互角だった。アオギリは自覚ある狂気、こちらは自覚なき狂気。自分で分かってない以上、こちらの方がタチが悪い。アオギリも大概ではあったが。

やがてジンは一人の少女を伴って戻ってきた。歳はいいとこ中学生、下手したら小学生だろうか。赤みがかかったウェーブ状の茶髪を揺らしながら、長身のジンの歩幅に早足で付いていつている。そんな少女が芯まで真っ黒なこの組織の研究施設に白衣を着込んで存在している事は、少なからずラステイネイルを驚かせた。

「雑談でもしている。適当な時間に迎えに来る」

そう言い残し、ジンはさっさと歩き去っていった。少女とラステイネイルは呆然とそれを見送り、次いで顔を見合わせた。少女の顔は困惑一色で、仮面の下では自分も同じような顔なんだろうな、と何処か他人事のようにラステイネイルはぼんやりと思った。

そして冒頭に戻る。

「……………」

「……………」

何を話せというのだろうか。共通の話題を持たないラステイネイ

ルとシエリーの会話は、残念ながら長続きしない。話のネタが多い分野は互いに畑違いだ。シエリーだって効率的な人体の壊し方など教わったって困るだろうし、ラストイネイルも新薬の構造なんて聞いたって一割も理解できない。

いや、どうしろと？

「……………ねえ」

「……………うん？」

シエリーの声に、首を傾げて聞き返す。ラストイネイルとしては大歓迎だ。今は取り敢えず、この耳の痛い沈黙をなんとかしたい。

「貴方が、最近噂になってる『組織最凶の暴力装置』？」

「え、そんな呼ばれ方してるの？」

知らなかつたなあ、なんて呑気な声を零すラストイネイルに、シエリーは半目を向けた。

「自分がどう思われてるか位、知つときなさいよ」

「いやあ、自分に対する評価にとんと興味がないものでね」

常識でしょ、と副音声の間こえそうな声音のシエリーの言葉を流し、ラストイネイルは戯けた調子で返した。実際、他人の評価に然程興味はない。究極的には一人で生きていける自信があるからこそその態度でもある。

「……………まあいいわ。それで、銃で武装した敵の中に突っ込んだ挙句素手で人体を引きちぎったって聞いたんだけど、本当？」

「ん？ああ、事実だよ」

別段隠すような事でもない。赫子や食性、再生能力辺りは隠せと言われてるが、筋力や反射神経は構わないと指示を受けている。規格外レベルの近接戦闘能力を持つ幹部として周囲には認知させるつもりらしい。それにしたって限度があると思うのだが。

うへえ、と言わんばかりに顔を顰めるシエリーの頬を摘み、戯れに引き伸ばす。ふひよ!?!とようやく年相応の反応を見せたシエリーに、ラストイネイルの肩が震えた。駄目だ、堪えられない。

「……………つ、ふつ……………」

「ひよつほ、ひゃなひなひゃいよー」

じたばたと暴れるが、残念ながら非戦闘員の抵抗でどうこうなる程  
ラストイネイルは柔<sup>やわ</sup>ではない。

ぐにぐにとしばらく弄り回し、シエリーの目が潤み始めた辺りで手を離す。ほんのり赤く染まった頬をすりすりときすりながら、シエリーが眼光を鋭くした。しかし目が潤んでいるせいで全く怖くない。むしろ微笑ましい気持ちすら沸き起こる。

「……………私、貴方の事苦手だわ」

「子供扱いは嫌かな？これは失礼」

ラストイネイルの言葉の端々に笑いが滲むのを聞き咎め、シエリーの視線が更に鋭くなる。しかし拗ねているようにしか見えない。頭を少し乱雑に撫でてやれば、意外にも払われはしなかった。

「おい、迎えに——何やってる」

タイミングよく、あるいは悪く、迎えにきたジンがラストイネイルに頭を掻き回されるシエリーを視界に収めた。呆れ半分、嘲笑半分の溜息がジンの口から漏れる。熟れきった林檎よろしく顔を真っ赤に染めたシエリーが勢いよく後ろに下がり、手持ち無沙汰になったラストイネイルは残念そうに手を下げた。

「ラストイネイル、帰るぞ。ついでに仕事だ、存分に暴れろ」

「了解。『組織最凶の暴力装置』らしく派手に暴れてきますよ、っと」  
「いい返事だ」

愉快そうにくつくつ笑うジンがコートを翻し、歩き去る。まだ顔が赤いシエリーに手を振って、ラストイネイルも踵を返した。

## 捕喰者のおしごと

ラストイネイルの朝は遅い。ほぼ昼に起き、まずはメールをチェックする。仕事を割り振る立場にあるジンやラムもラストイネイルが朝方に床に着く事は知っているが、だからと言って連絡が来ない訳ではない。最近の悩みは生活の昼夜が逆転しつつある事。確かに夜陰に紛れてヒトを喰らうが、別に夜行性ではない。だというのに夜にばかり仕事を振られるせいで、生活リズムが乱れて寝起きが悪くなってしまうていた。仕事の特性上仕方がないのだが。

案の定メールに着信が一件。メールを開き、割り振られた仕事を確認する。ラストイネイルに今日回された依頼は悉く暗殺。赫子を細く細く伸ばせば排水溝やダクトといった侵入不可な経路を通ってターゲットを抹殺可能であることと、“組織最凶の暴力装置”の名が裏社会で広く出回ったせいで組織に楯突く者達が激減したが故である。どうも任された殲滅任務をR-18Gに振り切らせ過ぎたらしく、歴戦のツワモノ共を軒並み嘔吐させたとかなんとか。特に食事後の残骸で。やりすぎどころかジンからはむしろ褒められたが、地味に神経を使う暗殺任務よりは気の赴くままにただ暴れるだけでいいので楽だったりする。

ともかく。

組織が用意した戸籍が記載された運転免許証を手に、少し遠出のドライブを敢行する。行く先々で不審死が多発するだろうが、それはそれ。職務に忠実であるが故に組織の闇に触れた犠牲者達には申し訳ないが、ラストイネイルも仕事なので諦めてもらう。

最初の標的は、幾多もの事件を調べ上げることと組織の存在に勘づき始めた正義感溢れる政治家。それだけならば組織も放置しただろうが、組織の存在を明らかにしようとして奮起しているらしい。あらまあ、と別段感慨もなく呟く。

正直者と正義が馬鹿を見る世知辛い世の中に上辺だけ嘆息しつつ、ラストイネイルは車を走らせた。

人間であることを大前提にした警備に喰種が苦勞するはずもなく、さくさくと依頼を済ませていく。地上に限なく見張られているなら、屋根から屋根へと飛び移ればいい。屋内に警護が敷き詰められているなら、排気口から赫子だけの中に入れてもいい。意図的に聴覚のみに全神経を集中させ、音で屋内の構造や人員の配置を読み取れば、後は赫子を伸ばして標的を殺すだけの簡単なお仕事である。

都合三人目の処分を終えたラスティネイルは、別段疲れてもいない身体をぐぐつと伸ばした。最近は何が辛い方にも注文をつけられ始めたのが辛い。何が辛いつて、指定されたシチュエーションが訪れるまで待たなければならぬのが辛い。ちよつと頭の中を空っぽにして無節操に暴れまわる位が、ラスティネイルの性に合っている。とは言え、ある程度地域を纏めてくれている辺りにジンやラムの精一杯の優しさを感じる。訂正。あの二人に向ける言葉が「優しさ」？致命的に似合わない。ラスティネイルの効率的な運用法を心得ていると述べた方がしつくりくる。

人目と監視カメラを避けて地面に降り立ち、踵を返して雑踏に紛れる。喰種の優秀な聴覚が雑音の中から微かな悲鳴を聞き分け、ラスティネイルは軽く喉を鳴らした。  
任務完了。

夜である。

普段ならジンに連れられて暴れに行ったり、一人寂しく肅々と暗殺しに行ったりする時間帯だが、今日は少々特殊な日。任務内容は暗殺。ただし、極力無残にという注文付きで。

つまり、殺すついでに喰つてこいという意味である。実に二週間ぶりの食事に、ラスティネイルのテンションも上がる。

不用心にも人気の少ない道を歩く標的を、赫子を用いて一瞬で拘束する。念の為に口も塞いだ上で壁に磔にするように持ち上げ、味見と

ばかりに腕にかぶりつく。暴れる力が一層強くなり、くぐもった声も大きくなる。頑張るねえ、とへらりと笑い、哀願するような目を無視して逆の腕に噛み付く。ラスティネイルの口内を血の芳醇な香りが満たす。身体が歓びに打ち震えるのを感じながら、湧き上がる欲求に従って一口、また一口と進めていく。

——ぱき。

湿った枯れ木を焚き火に焼べたような、子気味のいい音が響く。苦悶の嗚咽を聴きながら、ラスティネイルは食事を続けていった。

ある日、日本のヨハネスブルグと名高い米花町において、数々の凶悪犯罪に慣れすら覚えつつある米花町民をすら震撼させる出来事が起きた。

被害者はとある有名な政治家。正義感が強いと評判で、麻薬や武器の密輸に対し政府に毅然とした対応を取らせるべく音頭をとっていた人物でもある。

その人物が遺体で発見された——それも、遺体の大部分が損壊した状態で。顔の半分近くが抉り取られ、身体も四肢は残っておらず、臓器は確かな医学的知識に基づいて遺体の側に丁寧に陳列されていたという。そして四肢の根元部分にあたる骨や肉には、噛み傷と思しき痕が残っていたとされ、胸部から腹部にかけての肉も明らかに足りなかったらしい。

どう考えても人の所業とは言い難いこの事件は食人鬼事件と呼称され、以降およそ数ヶ月に一度のペースで被害者を出すこととなる。



## 捕喰者と幹部候補さん

ジンに呼び出された。

起きたら連絡しろというメールに従ったら、今すぐ来いと端的な一言を告げられたのち切られた。もう慣れてしまったので今更だが、説明位はして欲しいと切に願う。

呼び出された部屋に向かえば、ジンの他に見知らぬ三人がソファに一列に並んで座っていた。

ラストイネイルから見て右側に座るのは金髪に褐色の肌をした青年。ともすればティーンにすら見える青年は、髪を染めてもいなければ日焼けしているわけでもなく、完全な自前の色なのだとか。それでいて名前は安室透、つまり純日本人。日本人要素が名前と童顔しか無いつてどういう事だ。

中央に座るのは、人好きのしそうな笑みを浮かべた青年。こちらも相当な童顔で、顎髭で何とか誤魔化そうとしているのだろうが、悉く失敗している。名前は緋色光。

左端に座る最後の一人はニット帽に長髪、おまけに目の下に菓食っている濃い隈が特徴的な男。三人衆の中で唯一年相応な外見年齢をしていて、なのに並ぶと老けて見えるのは何故なのだろうか。さつきその辺で何人か殺って来ましたと言われても違和感のない風貌で、穏やかな第一印象を受ける他二人と並んでいるせいで一際異彩を放っている。男は諸星大と名乗った。

「こいつら三人をお前に任せる」

胡乱げな視線をジンに向けたラストイネイルを、一体誰が責められようか。自己紹介の中に混ぜていた話によれば、安室は情報収集、緋色と諸星は狙撃が得意ときた。実力を十全に発揮する為には単独行動が大前提であるラストイネイルに、喰種としての側面を知らない他人を付ける意味がわからない。身一つでカチコミをかける戦法上、別段指導できることもない。

その視線を受け、ジンが口元をにやりと歪めた。非常に愉しそうな

顔だった。

「手始めに、ラスティネイルの任務を見学してこい」

ああ、とラスティネイルは納得した。篩に掛けてるのか。

この組織には鬼門があると言われている、らしい。らしい、というのは、その鬼門がラスティネイルを発端としているためだ。というのも、ラスティネイルの仕事場の片付けが凄惨に過ぎて吐くのだとか。実働系の幹部であるラスティネイルは基本的に暴れるだけで終わるが、その後の片付けは下っ端の仕事である。そこで吐くのが下っ端の間では一種の洗礼と化しているらしい。

狙撃手と情報屋なら経験していなくても無理はない。それを見せつけて耐性を付けさせると同時に、反応を見ておけ、ということなのだろう。NOCなら大抵の場合怒りに染まった目をするか、飄つていれば止めようとしてくる。ジンの視線から察するに、少なくとも安室と諸星は疑われている。特に諸星。根拠はジンお得意の勘だろう。これがまたよく当たるから困るのだが。ただ、今回は個人的な嫌悪が含まれている気がしないでもない。

面倒な事になった、とラスティネイルは溜息を吐いた。

ラスティネイル。組織幹部の一人で、ジンをして戦闘になつたら詰みとまで言わしめた異色の幹部。素肌を一つも晒さない上に声まで変えている幹部——今は上司となった人物の姿をバックミラー越しに眺め、安室透は溜息を吐いた。

顔を見せないのは組織のナンバーツーであるラムの命令のようで、身元特定に繋がる情報は残念ながら得られそうもない。公安警察の一員としての顔を見抜かれないように気を付けながら、組織の同期二人と上司を乗せて車を走らせる。

車を停めたのは、公安の方でもマークしていた犯罪組織の拠点付近だった。車を降り、安室を含めた三人を少し後ろに下がらせたラスティネイルの背を見つめる。道中に説明された情報によれば、ここは組織との取引を反故にした犯罪組織のようで、今回は他組織への見せ

しめも兼ねた報復行動なのだとか。

お手並み拝見、と胸中で呟き、ラスティネイルの指示通りに物陰に隠れて様子を窺う。ラスティネイル本人は隠れもせず、真正面から堂々と進んでいく。定石どころか常識を真つ向から無視した行動に、安室の口から間拔けな声が漏れた。銃を構える音が複数聞こえ、その音と同じだけの人影が現れる。ゆるゆると進んでいたラスティネイルの姿が、人影を見咎めた瞬間に掻き消えた。

「……は？」

呆然と呟いたのは誰だったか。気付いた時には人影は一つ残らず倒れ伏していて、ラスティネイルの手には人影と同じ数の頭部が握られていた。

「何呆けてるのさ。ほら、行くよ」

三人の困惑を一蹴し、ラスティネイルが頭部を放り捨てて手招きする。

それに応じて足を動かしながらも、安室の頭の中は混乱一色だった。ちらりと見かけた切断面が異様に滑らかだった事も混乱を助長する。斃した？あの距離を一瞬で詰め、あまつさえ全員の首を獲って？素手だったにも関わらずどうやって？

ラスティネイルは歩を進める。三人の混乱など一顧だにもしない。固く閉じられた扉を蹴りで吹き飛ばし、目についた敵を捕まえては振り回し、時々戯れに振じ切ってみたりしている。回し蹴りで人体をミンチにするとかありえない。安室は我が目を疑った。警察学校の同期に散々ゴリラだの何だの言われた安室ではあるが、自分がゴリラならあれは一体何なのだろう。怪物、そんな言葉が脳裏をよぎる。

銃器ごと手を握り潰し、壁ごと体を蹴り碎きながら返り血を浴びるラスティネイルの姿を見て、ああ、と安室は何かを悟った。

ラスティネイル。その名の通り、錆びた釘に似た色を持つカクテル。そのカクテル言葉は「貴方の苦痛を和らげる」。

現世こそ地獄、なんて言葉もある。それを考えれば、ある意味正しいのかもしれない。それでも全身を赤錆色に染め上げた怪物が「貴方の苦痛を和らげるラスティネイル」だなんて、冗談にしたってタチが悪い。

## 幕間・他人から見た捕喰者

C a s e 1. ジン

ジンがそれと出会ったのは、取るに足りない筈の仕事の時だった。

その時の仕事はなんて事ない、ヘマをした末端の構成員を処分する事だった。ジン本人と副官のウオツカ、ついでに丁度一緒にいたベルモット。対象が複数とはいえ末端に対して組織の処刑人たるジン一人が出張るだけでも過分だというのに、幹部が三人などいつそ処分対象が哀れになる所業である。警戒こそすれ緊張感もないままに足を運び、そこでジンは逸材を見出した。

今でも思い出す度に愉快でたまらない。かつて、血で手を汚しているというのに、気にした風もなく頭を掻きながら溜息を吐いてみせた青年は、今はラステイネイルの名を掲げて組織に属している。

埃っぽいコンクリートの上に散らばった数人分のバラバラ死体、辺り一面にぶちまけられた新鮮な血、その中心で何でもないように佇む青年。あまりにアンバランスすぎて、幾多の死地を渡り歩いたジンすらも一瞬呆気にとられた程だった。

必ずや組織の益となる。

その確信とともに困い込むべく勧誘をかけた時は、同行していたウオツカとベルモットに正気を疑われた。ジンも気持ちは分からないでもない。平々凡々な見た目から想像もつかないサイコパスぶり、どれほど酷な環境にいたのかと尋ねたくなる。この男は恐らく、人間の集団には根本的などころで馴染めない。

だというのにジンがわざわざ勧誘したのは、勘によるところが大きい。幾多のNOCや組織の益の元をその勘で察知してきたジンは、本人が意図して重きを置く冷徹な思考よりも時に勘を頼みとする。それは己への自信の表れであり、自身の信条よりも組織の益を優先する忠誠の発露でもあった。

そうして招き入れられた男は、その異質さを以って特例で名を与え

られた。ジンの勘は当たっていた。組織にすら微妙に馴染めていない節のあるこの男が表で平穩無事に生きるなど土台無理な話であるし、まかり間違つて敵対組織に所属されていたならば、ジンどころかジンが忠誠を捧げるボスの身とて危うかつたろう。流石のジンも、軍用ヘリの機銃すら生身で耐え抜く怪物に勝てるなどとほざける程自惚れてはいない。

ジンは時々、男を連れて任務に行く。ジンすら時折足が重くなる程に凄惨なやり方をする男が気に入っているのもあるし、男が裏切る素振りを見せないか様子を見る為でもある。理由なんて様々だし、何なら理由なんてない時もある。

それでもジンは時々男を連れて任務に行く。

そんなジンの一番の理由は、平穩に暮らしたいなんて宣いながら人を引き裂く、この無垢で歪な怪物の暴虐を間近で眺めたいが故である。

## Case 2. ウオツカ

ウオツカはその日、抗えない死という物のカタチを知った。

ウオツカがそれを初めて見たのは、位置とスケジュールが都合良かったから、以外に理由のない程に取るに足らない任務を割り当てられたジンにいつもの如く随行していた時だった。

マネキンみたいにバラバラにされた骸は非現実的で、中央に立つ平凡な男の存在も相まって幻覚でも見ている気分させられた。遅れて漂ってきた、嗅ぎ慣れた鉄錆の匂いによろやく脳が覚醒する。更に一拍遅れて目の前の光景が現実だと認識が追いつき、一気に血の気が引くのが分かった。

何が恐ろしいって、銃を携えているのが見えている筈なのに、その目には恐怖も警戒も見えていない事が恐ろしい。面倒なことになったなあと言わんばかりの僅かな苛立ちと、敢えて例えるならば蛙を前

にした蛇が鎌首をもたげて見据えた時のそれによく似たモノを内包した瞳。アジア系にありふれた黒色の双眸が、ウオツカ達を敵ではなく餌として映している。その狩りの前の捕食者の如き雰囲気も、何かの間違いかと思えるほどに一瞬で、かつ巧妙に掻き消えたが、背筋に氷柱を突き立てられたかのような寒気は消えていない。むしろ慣れた様子で繕われたことで更に増した気さえする。

組織に男を招かんとしたジンへの抗弁も虚しく、同じ車に乗ることとなった。気分は空腹の虎に与えられた生き餌である。思えばジンにあれ程までに意見したのは初めてではなからうか。運転は淀みなく、冷や汗はその量を増やしながらも、つらつらと思考だけが男の事を考えないように後ろ向きに全力疾走している。腕にナイフを突き立てて無傷であった所を見た辺りで、ウオツカは己の精神衛生の為に、理解することを放棄した。

目を瞑れば今でも思い出せる。あれは男を拾った数日後、特例で幹部に据えるか否かを試す試験の時だった。錆びた鋸で無理矢理切り分けたようなズタズタの切れ目。無造作に引き千切られたかに見える残骸。不自然に壁や天井に張り付いた赤色のかつて人だったモノ。突破するのに一苦勞しそうな鉄製の扉は拉る程の力で蹴り飛ばされた拳句、壁との間に哀れな犠牲者をサンドイッチして破裂させている。

極め付けは、最上階で待っていた男の姿だった。コーヒーカップ片手に美味しそうに死肉を頬張るその様が、ウオツカの生存本能を大きく刺激した。かつて見た獲物を狙う狩人の目が、思い違いでも何でもなくそのままの意味であったと知って。喉を焼く液体が胃からせり上がり、男から走って離れた。不興を買えば次にああなるのは自分だという予感があった。

男は特例でコードネームを授かり、ウオツカと同僚となった。個人で動くこともあれば、他の幹部らと共に任務をこなす事もあるという。風の噂では、ラムの命で不審者そのものな格好をしているにも関わらず仲は悪くないらしい。同じ光景を見たベルモットも付き合いはそこそこにあるとか。自分が喰われるかもしれないという恐怖さ

え乗り越えられれば、素手で車をスクラップにする男なのだから戦力としては申し分あるまい。尚、ウオツカは未だに恐怖を克服できていない。

ウオツカはあの日、死のカタチを知った。

死は、どこにでも居そうな平凡な男のカタチをしているのだ。

### Case 3. シエリー

シエリーがその人物に抱いた印象は、変な人、だった。

シエリーは幹部の中でも少々特殊な、年若い幹部である。世間一般には中学生と呼ばれる年頃である現在、シエリーに割り振られた仕事はとある薬を開発する事。親が残した資料を元に薬を作っている中で、再現と言った方が正しいのかもしれない。組織に属していれどもほぼ一般人である姉の為に従事しているのは誰もが承知の事実で、実際シエリーも隠したことはない。

だからこそシエリーの所には、組織が信を置く幹部がしばしば様子を見に来る。それはいつそ清々しいまでの無言の脅迫で、だからこそ法も倫理も足蹴にする組織のやり口をよく知っているシエリーには効果的だった。

ある日、新しい幹部が任命されたと小耳に挟んだ。組織そのものに別段興味のないシエリーからすれば聞き流す程度の関心だったが、それでもある程度知識がついてしまう位には良く噂されていた。

コードネームはラステイネイル。組織最凶の暴力装置と渾名される程の破壊・殲滅能力を持ち、その任務跡は凄惨の一言であるという。立场上、非情な人体実験も淡々とこなすシエリーが資料の添付写真を見て青褪めた程度と言えばその惨状も想像できよう。端的に言って、人間の所業ではなかった。

その噂が流れて少しした後、顔合わせだと言ってジンが一人の幹部を連れてきた。どこもかしこも黒一色で、顔すら仮面で隠した人物。

ラストイネイルと名乗ったその人物は、前評判からシェリーが想像していたよりもずっと温かみのある人柄だった。何故ここに居るのだろう、と思ってしまう程には。子供好きなのか、シェリーの頭を撫でる手が存外慣れていたのが印象的だった。あの手が人体を易々と引き千切るといふのだから驚きだ。

ラストイネイルと会った時間は決して長くはないし、回数もジンなどど比べれば遥かに少ない。それでも回数を重ねるごとに分かってきた事もある。

ラストイネイルは歪だ。シェリーが氣にいる位には組織に似合わない好人物だし、逆に組織らしく残酷でもある。本来両立しない筈のそれらは、しかしラストイネイルに限って成立している。曰く、平穩に暮らしたい。ジンの前でそう言いながら抹殺対象の頭蓋を握り潰したというのだから、大したものである。本人の中では、平穩に暮らす事と殺人を犯す事は相反する事ではないらしい。

人として好ましく、悍ましい。だからこそシェリーは、ラストイネイルを一言でこう表すのだ。

変な人。